

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2006年9月

博士論文審査報告書

論文題目 「意思・希望」表現における丁寧さと  
「私的領域」との関係

申請者氏名 李 承禧 (イ スンヒ)

本論文は、「意思・希望」表現における「丁寧さ」と「私的領域」との関係について論じたものである。

論の中心をなす構成は、「5. 文例集の例文とEメール文の分析」「6. 『～たいと思う』に関するアンケート結果の分析」「7. 「当然性」が高い場面を想定したアンケート結果の分析」「8. 日本語母語話者によるインタビュー結果の分析」「9. 韓国語母語話者が持つ違和感と日本語教育への提案」「10. 結論」となっている。

申請者の修士論文において「相手側」の「意思・希望」を引き出す表現に関して考察したことを受け、「自分側」の「意思・希望」を述べる表現について、具体的には「意思」と「希望」の両者に使用できる「～(し)たいと思う」という表現を採り上げ、「待遇コミュニケーション」の観点から、その使われ方を「丁寧さ」との関わりの中で詳細に分析、考察している。なお、本論文においては、主に「～(し)たいと思います」の形で文末に現れる例を研究対象としている。

鈴木睦氏の「私的領域」を発展させ、「自分側の私的領域」という、従来ほとんど指摘されていなかった概念を提唱した点は優れており、「～(し)たいと思う」に限らず、「自分側の私的領域」に係わる表現との関係を明らかにしていくことには、意義があると認められる。

『文例集』『Eメール文』『～(し)たいと思う』に関するアンケート」を資料として、韓国語を母語とする学習者にとって問題となる「～(し)たいと思う」という表現について様々な観点から考察した上で結論を導いており、『文例集』の中に表れている表現にとどまらず、Eメールにおいて実際に使用されている表現について、量的な分析の対象としている点、また、当該表現が現れる環境と「丁寧さ」との関係に関する分析を、インタビューを行って質的に補っていることにより、表現主体が丁寧さを損なわずに自分の意向を伝えようと選択した表現を理解主体がどのように受け取ったか、という判断について窺い知る一助となっている点は、評価できるものである。

また、結論として述べられている、「動詞+たいと思う」の使用が、上下関係とは関与しない傾向にあり、むしろ改まった「場」で使用されること、「決定権」の所在を明確にしない意識につながっていること、などの点は、「待遇コミュニケーション」の観点からは重要な指摘であると言える。

ただし、下記のような課題が残されていると言えよう。

・「自分側の私的領域」の内容が十分には説明されていないため、「～（し）たいと思う」の丁寧さと私的領域との関係が必ずしも述べ切れてはいないのではないか。

・「～（し）たいと思う」は話し言葉では使用条件に制限があるが、書き言葉では広く使われるという点、および、Eメールの文体は、一般的には、話し言葉と書き言葉の中間と言われており、書き言葉だとは言いきれないのではないかという点については、さらに検討を要する。

・アンケートを実施する際の指示がどういった文言であったのかが不明確であったり、「当然性」についての定義や説明が簡潔にすぎたりすること点が挙げられる。前者に関しては、論文中では「4つの表現の中から相応しい表現を選択して、それが一番丁寧だと感じた理由の記述もお願いした。」とされている。この場合の「相応しい」と「丁寧」の関係はどういったものか、インフォーマントの解釈によって、アンケートへの回答が変わってくるのではないか（具体的には、「ふさわしい／丁寧な感じがする／不自然な感じがする／謙遜／自然」といった記述として表れている）。後者に関しては、「当然性」が有無ではなく高低で捉えられるものとしてあっても、高低レベルの感じ方の個人差は考慮しなくてよいのかという疑問を生む。記述を丁寧に行うことによりこうした問題点は解消されると思われるので、全体的にもう少し書き込んでほしかった。

以上のような課題が残るとはいえ、本論文は、韓国語母語話者としての論者の持つ問題意識に端を発し、上級日本語学習者にとっても習得の困難な、そして日本語母語話者にとっても自覚的には捉えがたい、「待遇」という観点から「～（し）たいと思います」を中心に「意思・希望」表現と丁寧さとの基本的な関係を明らかにしようとした、意欲的な論考であり、独自性のある論文だと認められるものである。その点において、日本語教育学の博士学位取得論文として評価に値すると判断するものである。

主査 蒲谷 宏（大学院日本語教育研究科教授）

副査 池上摩希子（大学院日本語教育研究科助教授）

副査 小宮千鶴子（大学院日本語教育研究科教授）